第７期町田市民文学館運営協議会第１回議事録

○　開催日時　２０２４年１１月１２日（火）　１８：００～２０：００
○　開催場所　町田市民文学館　大会議室
○　出席委員　会長　　渡邉正彦
　　委員　　岩崎　修
　　委員　　卜部敦彦
　　委員　　冠那菜奈
　　委員　　草刈大介
　　委員　　中垣理子
　　委員　　名取玲子
　　委員　　渡辺祐真
○　欠席委員　副会長　若宮和男

○　事務局出席職員
　　市民文学館担当課長　　野澤茂樹
　　担当係長　　荒井敬介
　　担当係長（学芸員）　　神林由貴子
　　主任（学芸員）　　山端穂
　　主任（学芸員）　　谷口朋子

○　資料
資料１　「町田市民文学館あり方見直し方針」に基づく 2024・2025 年度の検討内容について
資料２　第 6 期で議論されてきたテーマの現在地と課題
資料３　開館からの利用状況の推移
資料４　2024 年度事業一覧
資料５　町田市民文学館ことばらんど所蔵資料一覧
資料６　2025 年度展示計画

○　次第

開会

１　委員自己紹介

２　事務局自己紹介

議事

１　町田市民文学館運営協議会会長、副会長選出

以下の二名に決定

会長　　渡邉正彦

副会長　　若宮和男

２　討議

（１）町田市民文学館のこれまでの経過と 24･25 年度の検討内容について

【事務局】資料 1～5 について説明

（２）2025 年度展示計画について

【事務局】資料 6 に沿って説明

…休憩…　（森村誠一展見学）

（３） 2026 年から今後 10 年間の町田市民文学館に必要なことはなにか？

【会　長】

まず、「今後 10 年間の町田市民文学館に必要なことはなにか？」について委員の皆さまお一人お一人にフリートークで構わないので、現状の認識や展示施設について、現在お考えになっていることや展望についてお話をいただきたいと思います。

【委　員】

「ブレイクポイントを迎えたことと「ゆるやかな撤退」に向けて」と刺激的な文言が並んでいるが、これについて説明してもらえますか？

【事務局】

町田市民文学館ことばらんどは「あり方検討」や運営協議会委員の皆さんのアドバイスに従い、毎年改善を続けて来ました。その結果 2020 年に新型コロナによって失った来館者をいち早く回復し、それぞれ要因は異なりますが、2024

年度は展示・教育普及・図書貸出・会議室貸出において過去最高またはそれに近い利用者数となる状況（ブレイクポイント）を迎えています。一方で、利用者が増加している状況に関わらず、2025 年度以降については大きな予算の減額が示されており、各事業の見直し・撤退が迫られています。委員の皆さまにはこうした状況をご理解いただいた上で、ご意見をいただけると幸いです。

【委　員】

予算を減らして展示を続けていくっていうのはなかなか難しいだろうなという気がするんですね。ただ並べただけとか手作りが増えてくるだけだから。特に今は他の美術館や展示施設が見せることに対して、空間づくりにお金をかけているので、そうすると入場者数に対しての影響っていうのがきっとあると思うんですよね。だから、そこの部分をどう割り切っていくのかということが 1 つあると思います。一方で場所を持っている優位性っていうのはすごくあって、展示ではなく、交流する場所としてこの場を機能させるということ、作家とか編集者とか文学に関わる、書籍の出版に関わるような人たちを呼んで、そこで小さな輪を作っていくみたいな方が元々文学っていうものが持っているパワーとか意味とかっていうものに近いのかなっていう気はしています。それは手間もすごくかかるし、人数が 1 回あたり 20 人ぐらいしか来ないし、大変だと思うんですけど、やりがいというか意味合いというか、人が入ってるのに予算を減らされて嫌じゃないですか。展覧会にその労力をかけるのは何かやるせない、みたいなことを少し相対化させるというのはあるんじゃないかなとは思います。

【委　員】

僕は普段現代文学とか小説とかについての仕事をしているのでトレンドという観点でお話すると、今、文学フリマとか個人で作る ZINE、同人誌と呼ばれるものなんですけど、これがかなり盛り上がっています。文フリは、これまで流通センターで開催されていたんですが、この冬からビッグサイトに場所を移して出店者数も来場者数もどんどん右肩上がりになっていて、今みんな作りたがってるっていうのはすごい印象として感じます。町田では 57577 展を過去に 2 回開催されていると思うんですけど、短歌とあともう 1 つはエッセイですね。エッセイと日記の出版点数も、一般の人が書いているという意味でも、作っている人の数が増えてると思います。プロの文筆家の方もいらっしゃるし、芸人の方とか、タレントの方とかがご自身の日記とかエッセイとかを発表してそれをすごい楽しんでいる。そして、今度はみんなが実際に自分で作ってみよう、それを印刷して出版してみようとして、文フリとかそういうところで売ってみようみたいな運動がすごいあります。なので、なんかそういうのは一つ、今後、先程、場があるということが貴重だって話をおっしゃっていたんですけど、なんかそういう交流の場だったり、出店の場だったりとか、なんかそういうことにこの場を使えるし、多分その人口は今後確実に増えていくと

思います。意外と文学館でそういうことをしてるところはまだないですね。あと、これがどれくらい広がりを持っていくかは分からないですけど、ちゃんとお金にもなっていく話でもあるので、なんかそういうところをうまく巻き込んでいくといいんじゃないかなと思います。なので、ここからとしてはそのキーワードとしてZINE、同人誌みたいなことはありかなと思います。

【会　長】

先程のお話の中に小さな輪ということが出てきて、やっぱりそういうことは一つキーワードになるかもしれない。マスのコミュニケーションというのが、やっぱり今後可能なのか、また多分文学館に合っていると思うんですよね。そういう視点から事業や展示の内容について考えていくこともできるんだろうなと思いました。

【委　員】

私の館は来年30年なんですけど、お客様の層もだいぶ変わられてきたりとか、同じような感想、同じような悩みを持っているなというふうに思います。ことばらんどは、本当にある意味文学館らしい文学館というか、本当に言葉にこだわった展覧会をなさっているのは、私がイチ来館者として思うところが大きくて、例えば私の文学館はそこまで突き詰めたテーマで言葉っていう風に今はもうできない。文学というテーマの中で色々な形で色々なジャンルを踏まえて展覧会を作っていくという方向にやっぱり舵を切らざるおえないところもあるので、言葉そのものに真摯に向き合うようなある意味展覧会っていうのは逆に羨ましい。私も本当にそれをもう一度やりたいなって思うぐらいの展覧会をされていて、それは今お話しされたとおり、ある意味そんなに大きいものではないけれども、言葉にこだわった、丁寧な展覧会や催しっていうのをなさっていくっていうのは、ことばらんどの一つのカラーというか、それはすごく思います。

【委　員】

人が来ても予算が減らされる実情をいかにマイナスじゃなくてプラスに考えるかっていうところで、高校生たちが勉強してたりとか、地域の方たちのハブというか地域の人たちがすごく当たり前に入れる場所になってきているっていうのは、場所として本当に認知されて、みんなの大事な場所になってきてるっていうことだと思います。そういう意味でもいい展示を見せたい、見て欲しいっていう気持ちもあるんですけど、妥協しちゃうと本当にもったいないというか、これだけの展示を作るのが大変なのはすごく分かりますし、ただ並べるだけにはなって欲しくないという気もちもあります。展示の企画は企画でありつつも、例えばそこは本数を減らすのかもしれないですけど、なんかやっぱり熱量をかけて展示する機会はちゃんとありつつ、でも、委員の方がおっしゃったみたいに作りたい人が今すごく増えているっていうのもあると思いま

す。デジタル時代って言われていますがアートの世界でも自分たちで作る同人誌だったり、作品だったりという市場が凄いことになっているので、作ってる人たちが交流できる場とか、そういうものを持ってこれる場所があるといいと思います。地域の人たちだけじゃない部分もあって、個人で入ってきたいと思う人たちがなんかこう入れるような方向性にも目を向けてみるのも良いのではないかと思います。それも多分、いくつかのレイヤーで見せ方を変えればいいのかもしれないなと思います。企画だったり、自分たちがこうプレゼンスしていく部分はあえて様々な角度・テーマに寄せてもいいのかもと思ったりしました。一方で、マネタイズして自分たちが稼いでやるみたいなことのやり方があると思うんですけど、それは割と難しいことなんでしょうね。そうすると質を変えていくという、やれることも限られることだと思うので、みんなに来て貰う部分と、こういう人に来て欲しい部分と、分けてみてもいいのかなと思いました。

【委　員】

人が入っても予算が減らされるという状況にすごく行政の難しさというか、悲しさというか、そういうのを感じつつ、皆さんがおっしゃったことにヒントがあるという気はしていてます。固定の空間があるって事自体はものすごく価値がある話なのかなと思いますし、さっきのこれまでの経緯の中で１階の雰囲気をちょっと変えることによって、いらっしゃる方が増えたみたいな話っていうのは、その場の作り方とか空間のあり方ですごく人が来やすくなる、入りやすくなるという事だと思います。それから、僕も今日夕方来て高校生が勉強してて、すごくいいなと思いました。文学館だから文学のことをしなくちゃいけないのではなく、ルールの中でなら、ここに来て自分で自由なふるまいができる、そういう、ゆるい雰囲気の中で自分のやりたいことができる。そこが入り口になって、面白そうな表紙の本があるから見てみよう、みたいなこととか色々興味が広がってくるみたいな事ってあると思うので、なんかそういう雰囲気は大事にしてやっていけるといいのかなと思いました。一方で先ほどおっしゃったような、普通の人が作り手になる、あるいはSNSとかで名前を知ってるような方が文章を書くみたいなことっていうのが、そういう場を使って何かをやってるみたいなことが、日常的に溶け込むといいですよね。例えば水曜の午後６時から誰かがイベントをやるよ。それを目指してお客さんが来るというようなことがやり易い雰囲気・設えがあると良いと思います。それでもう少し人が来やすくなったり、場所が認知されたりするようになるのではないかと思いました。また、ここの位置であれば版画美術館との連携なんかも考えられるのではないかと思いました。

【事務局】

予算の見通しは大変厳しいと考えていますが、文学館にご来館いただいているお客様が増えていて、活動を支持していただいている状況ですので、ネガテ

ィブではなくポジティブに捉えております。来館者・事業の参加者が年々減っているような状況に比べればずっとマシです。それぞれの手法を見直し、文学館を支持してくれている方たちと一緒になにができるのかを探っていくことが必要だと考えています。

【委　員】

子どもたちに携わってきて 30 年以上になるんですけれども、最近の子どもたちはそんなの知ってるって言うんですよ。学習していて要するに先取りしていたり、塾に行って習っていたりということで、知ってるっていう。学校としてはいろいろ工夫をしているんですけど、もう前もって知ってるんですね。でも、それはすごくもったいないなって僕は思っていて、かといって塾にいくなとか先取りした勉強するなっていう風には言えないんですけども、今日この森村誠一展を見せていただいて、すごい面白かったですね。知的好奇心がくすぐられる。知的好奇心ということが子どもたちにとっての原動力になるんじゃないかなっていうのをすごく思っていて、この文学館がそういう知的好奇心とかそういうものが満たされるような場になっていただけたら、子どもたちにとっても懐かしい場所で何度も足を運びたくなるような場所になるんではないかなっていうのを感じさせていただきました。

【委　員】

展示をしない文学館っていうのもあるんだって、それはお金がなかったら企画展を考えなくても文学館としてやっていく道を探ればいいんだっていうのが一つ、そうなんだなと思いましたね。

それと、私は大人をどうにかするよりも教育で子どもを育てることの方が時間かかるようだけど、確実で手っ取り早いというか、ずっと効率がいいんじゃないかって思ってるんですね。これから 10 年先のことを考えた時に、例えばさっきの下で勉強してる高校生があと　10　年経ったら立派な大人だし、ショートショートをやってますけど、参加している中学生・小学生がいるし、文学館祭りをやれば、まだ学校に上がる前の子たちがヨーヨー釣りとかスーパーボールとか、文学とは関係ないですけど来てますし、夏休みの展示もすごく子どもが来てるんですよ。子どもがいるところには親も付き添いで来てるし。だから子どもが来ると 1 じゃなくてプラスアルファがくっついてきてて、その子たちの　10　年後はすごく未来は明るいというか、その子たちが今いますから、そういう意味では決して暗くはないと思います。この先　10　年のあり方を考えた時に、彼らが文学館を支えてくれる人になる可能性はあると思います。

【委　員】

そういう子どもたちが企画するとか、ちょっと手はかかると思うんですけど、

例えば高校生が子どもたちに向けるとか、自分ごととして、それをちゃんと最後までやりきるのは大変だと思うんですが、そういうことができればと思いますね。お祭りにしても彼らがプレイヤーになるみたいな。入り口を作ってあげると、全員じゃなかったとしても、何人かは凄いやりたいって子が出てきて、ずっと記憶に残って、友達でできてとかなんか大学生になってもなんだかんだと関わってくれる、そういう風になっていったらいいんじゃないかと思いますね。やる気がある子たちってすごいですし。

【委　員】

インターネット空間がもっとあると情報だけでなく場としても色々活用できると思うんです。僕の仲良くしている人に tiktok で文学の紹介をしてる人がいるんですけど、彼が本を紹介すると、中学生や高校生が買って読んだりするんです。そのネット空間にいる 10 代とか 20 代の人たちはネット空間の情報の方がアクセスしやすいので、ことばらんどがネット空間に紐付いてることが大事だと思いますね。サロンの本の貸出が上がっているって話もあったんですけど、例えば、本の地図みたいなものを作成するとか、おすすめの本とかそういうものを動画にして、こういう気持ちの時にはこういう本がいいですよとお勧めの本を示したり、この本を読んだら次はこれがありますよとか、そういう動画を作ったり、サイトを作ったりすると、ことばらんどに行くとこういう風に情報もらったみたいなのが分かるとすごく需要があると思いますね。それを作って、1 階サロンの展示と紐付けたり、さっき予算がっていう話があったんですけど、動画を作って、それに関連する本を置いたりとか、おすすめの何か。例えば作家さんの写真を置くとか抜粋部分を提示するとかはそんなに予算がかからずできるので、それを展示にしてみるとか、それを作りたい、その本の書評をしてみたいとか、ビブリオバトルっていう本もおすすめ大会であるとか、最近各地で流行っているので、なんかそれを実際にことばらんどでやって、うまくいった子がいたら、それを展示にしてあげるとか。本を紹介する、本を読む、それはネットとか展示みたいなものをうまく連携させてあげられると訴求力もあって、イメージもあるし、いいんじゃないかなと思いますね。

【会　長】

場の儲け方っていうのも、色々ありますね。リアルな場だけではなく、バーチャルなところに何かそういうものを築いて、それをまた違う方向に引っ張ってったりすることもできるでしょうし、そこら辺はお金との絡みもあるのかもしれないですが、可能性としては知恵を出していけば色々と得るものがあるような感じがしますね。

【会　長】

委員の皆さま、ありがとうございました。様々なご意見をいただきましたので、

この先発展させたりですとか、問題を募っていくですとか、色々なことができる可能性が出てきたのではないかと思います。本日の会議で出たお話については事務局にまとめていただいて次回以降の会議で検討していければと思います。それでは、最後に第 2 回の会議のスケジュールについて、事務局から説明していただけますか。

3　その他

（1）第２回運営協議会スケジュールの確認

【事務局】

第２回の会議は６月に開催いたします。少し間が空いてしまいますので、開催が近づきましたら事務局から日程のご提案をさせていただきます。

【会　長】

残り 5 分ぐらいありますが何かお話したいことはありますか？

【委　員】

書きたい、つくりたいという気持ちはどこから出てきているのでしょうか。

【委　員】

最近は SNS っていうものが当たり前になっていて、僕の弟は今大学生なんですけど、彼らって小学生とか中学生ぐらいの時から SNS があって、作りたいっていうことが特にハードルが高い現象とかじゃなくて、呼吸するように常に書いてるので、発信すること、作ること自体は割と日常なんですよね。せっかくならそれをもう少しと違った同人誌みたいな形でやると、ちょっと特別感が出てくるっていう。僕が中学生、高校生ぐらいの時ってまだガラケーからスマホみたいな世代だったので、普通に発信するっていうことがちょっとハードルが高かったんですけど、今だったら SNS だけでなく Podcast とか YouTube みたいな音声とか映像で発信するっていうことも、彼らは当たり前なので、受け手として純粋に見るだけや読むだけではなくて、その中に地続きに発信すること、作ることがあるということかなと思います。

【委　員】

一方で、SNS 疲れもあるじゃないですか。でも文学フリマとか、コミケもそうですけどリアルな場にあの数がひしめき合うことを逆に渇望している、若い子たちにとって熱量もあるんですよね。やっぱりそういうリアルでの何かみたいなものを渇望しているというのがあるんですか？

【委　員】

そうだと思います。今の例えば Z 世代に流行っている BeReal って言われる

SNS アプリがあるんですが、通知が来ると 2 分以内に写真を撮って up してくださいみたいな恐ろしいシステムなんですけど、今来たらもう写真を撮って up しないといけないんですよ。僕には到底考えられないですけど、それは多分しんどいんですよ。今は常時接続で常に世界と接続しちゃってるっていうことがしんどいがゆえに同人誌ってある種閉じた空間になっているというか、顔が見える範囲だけ届くっていうのがかえって心地良い気がするんですよね。今、何でもかんでも自分が発信したことがもうすぐさま世界に行く、下手すると炎上する中で、自分の大切なことは紙にしてみるとか、手の届く顔が見える範囲で届けるっていうことに、特別な意義が出てきてる。発信することが当たり前だからこそ、かえって狭くすることに価値が出てるんじゃないかなと思うんですね。

【委　員】

そういう時代だからこそ言葉を本当はすごく大事にしなきゃいけない。特に若い世代がこれから成長していく時に、言葉の重要性とかコミュニケーションの価値、言葉って何なのかを考える時が来ると思うと、こういう場所での活動って図書館とはまた違う、なにか良さが見えてくるのではないかと思いますね。

【会　長】

他にはよろしいでしょうか。それでは本日の討議はすべて終了いたしました。これで運営協議会を終了いたします。委員の皆さま、ありがとうございました。